

「国土の均衡ある発展」と建設産業

米田 雅子

論説委員

慶應義塾大学理工学部教授

わが国は、戦後の荒廃した国土から、台風や地震等の相次ぐ災害を乗り越えて、欧米に追いつけ追い越せと社会基盤づくりを続けてきた。そして、高度成長を達成し、世界第二位の経済大国となり、人々の豊かな生活のための基礎が築き上げられた。現在、わが国の社会基盤が成熟しつつあり、少子高齢社会の到来とともに、建設産業は厳しい時代を迎えている。

建設産業の特徴は、公共事業を担っているために、政治や行政との結びつきが強いことにある。土木事業は「国づくり」であり、昔をさかのぼれば、平城京の造成や江戸の開港などは、政治そのものであったといってもよい。

日本の建設産業が転換期にあることは誰の目にも明らかであろう。ここでは、少し過去を振り返り、公共政策の面から、建設産業の来し方、行く末を考えてみたい。

戦後、急速に進んだ工業化により、多くの若者が農村から都会に移り、農閑期には多くの男が都会に出稼ぎにいった。当時の高度成長は、そのまま放置すれば農村の崩壊につながるくらい、過激な社会構造の変化であった。その弊害を是正するために1950年の国土総合開発法で「国土の均衡ある発展」政策が始められた。この方針は、高度成長のうみだす弊害「都市の過密と地方の過疎」を解消するために、「地方に先行的に道路や空港などの社会基盤をつくり、工場を誘致して産業の分散立地を図る」ものであった。このおかげで、農村の崩壊が防がれ、格差の少ない1億総中流の社会が実現した。ただ、工場が誘致されなかった地域では、公共工事の現場が地域の雇用の場となっていった。その後、「国土の均衡ある発展」は、高度成長が終わった後も「三全総」や「ふるさと創生論」に受け継がれ、国家の基本路線になった。

国土建設には、政治家と官僚と建設業者の三者、つまり方針を決め、企画・計画し、実施する人がそれぞれ必要であり、地元で公共事業を誘導する際には、政官業が協力して働いた。また、公共事業は広く地域の雇用に結びつけるために、官公需法により、地域の中小建設会社への発注比率の目標が定められた。このため、道路を分割して小規模工事にして発注する方式等が採用されてきた。高い技術力を要するトンネルや橋などの工事においても、大手建設会社受注の工事に、ジョイントベンチャーとして地元の中堅・中小建設会社が参加できるような方式がとられた。

こうした中で、戦後の建設産業のひとつの特質がうまれた。建設産業は本来の社会基盤整備に加えて、地方の雇用の受け皿という役割も担った。現在、この方針にも転機が訪れつつある。地方の社会基盤は、まだまだ足りないものがあるものの、全体としては充足に向かっており、公共事業だけに頼らない新しい格差是正の方針が求められている。例えば、地方分権と税源移譲を本格的に進めるとともに、従来の業界構造や業種ごとの法制度にとらわれず、農林水産業も含めて地方産業を再構築していくためのビジョンと体制づくりが必要である。例えば、中山間地では、建設産業として国土を守りながら、高齢化の進む農業の作業代行や、路網整備を含む林業も行うなど、地域を支える複業企業へと建設会社が多角化していくことも有効である。これは、建

設雇用の役割の軽減につながる。

ふりかえれば、戦後の建設産業は国土建設に邁進しながらも、ここにはつねに光と影がともなってきた。光の部分は、日本の奇跡の高度成長をささえてきた道路、鉄道、ダム、港湾、造成などの社会基盤づくりであり、世界に誇る土木技術であり、災害の多いわが国で安心・安全な生活を守るべく基盤整備に励む「縁の下の力持ち」の技術者の誇りである。影の部分は、公共事業における政・官・業の癒着などの問題などである。土木学会をはじめ技術者は、光の部分に目をむけて、「モラル確立こそ、土木技術者の本懐」と説く。その一方で、新聞は影の部分に目を向けてきた。

時代は変化し、「雇用の受け皿」としての建設産業の役割が終焉を迎えつつある。これは、本業の有るべき姿への回帰であり、建設産業の「影」を薄めて、「光」を増やすことにつながる。現在、縮小を迫られているのは、「必要な社会基盤」ではなく、「雇用のための公共事業」である。これからは、戦後の高度成長期に作ってきた道路・鉄道・港湾などの社会基盤を活用し、公共事業だけに依存しない地域の雇用創出策が必要である。

国土が脆弱で山間地が多く、自然災害の多いわが国では、技術力の高い大手建設会社にくわえて、各地域に風土を熟知した優秀な建設会社が不可欠であるのはいうまでもない。必要な社会基盤を、長期に使用できる良質なストックとしてつくり、着実に維持管理していく建設産業こそが求められている。

現在、建設産業はきびしい状況にあるが、いたずらに将来を悲観してはいけない。経済対策に翻弄されなくなることは、頑張る技術者が報われる明るい世界が近いことを意味している。